

第 63 期定時株主総会 質疑応答集

Q. 光電融合など、アドバンストパッケージング分野における当社の取り組みと成長機会について

A. この領域では多様な技術が登場しており、当社の豊富なプロダクトラインアップを生かしたソリューションが提供できる機会であり、積極的に取り組んでいる。この分野では、テスト工程やウェーハとウェーハを接合したり剥がしたりする新製品の展開も順調に進んでいる。とりわけ、ウェーハ接合に関連する事業はこの 2 年で 3 倍に成長し、前期はこの装置の売上高が 300 億円となった。今期はそれから更に 60%の成長を見込み、2030 年の本装置における売上高は前期の 10 倍の 3,000 億円以上に達すると予想している。

Q. レアアース調達リスクへの対応について

A. 半導体製造装置で使用するレアアースについて、調達先の中国等特定地域への偏在リスクに対応するため、数年前から調達先の拡大（代替国・拠点の開拓）を進めるとともに、レアアースフリー部品の開発も進行中である。加えて、BCP 対応として一定量の在庫を確保し、業績への影響を抑えられる体制としている。

Q. 株式分割の考え方について

A. 株式分割については、株主さまが投資しやすい環境を整えることを重視しつつ、株主総会等での対話におけるご要望にも寄り添いながら判断している。今後も、株主さまとの対話、東京証券取引所のガイドライン、市場動向、株式の流動性、株主構成等を踏まえ、時価総額の最大化に向けて適時適切に実施していく。

Q. 当社のさらなる成長について

A. 当社として、あくまでも今は中間点と考えている。さらなる成長に向けては、半導体の先端工程に広がるビジネス機会を捉えることが重要。当社は多様なプロダクトラインアップを強みに、お客さまと 4 世代先、すなわち約 10 年先の技術ロードマップを共有し、高いヒットレートで Next Generation Products を創出することで、主要プロダクト群をすべてシェア 1 位へ持っていきたい。加えて、成膜領域における Served available market (SAM) へ進出・拡大を図っていく。ロボティクス等の DX ソリューションも組み込み、さらなる成長を目指して取り組んでいく。

Q. 『守りを攻めに』変えるガバナンスの取り組みについて

A. 一般に「守り」とされる安全、品質、法令遵守、エンゲージメント、リスクマネジメント及びセキュリティなどに関し、当社では「守りを攻めに」という考えのもと、プロアクティブに取り組んでいる。攻めのガバナンスの具体例として、セキュリティは 24 時間 365 日モニタリングする業界最高水準の仕組みを導入している。エンゲージメントでは国内の離職率が極めて低く、その結果として情報セキュリティの観点でもお客さまから高く評価されている。さらに、安全面では TCIR（労働時間 20 万時間あたり人身事故発生率）が業界トップクラスの水準を達成しており、さらなる改善に取り組んでいる。これらの攻めのガバナンスを当社の魅力として、さらなる企業価値向上につなげていきたい。

Q. プラズマエッチング装置の成長戦略とシェア向上について

A. エッチング市場のうち、絶縁膜向けは 55%という高シェアを維持しており、今後も DRAM の成長や配線層の増加に伴って当社シェアをさらに伸ばせるポテンシャルがあると考えている。一方、導体向けエッチングでの当社のシェアはまだ小さいものの、最先端ロジックのお客さまにおいて、最もクリティカルな工程で POR※を獲得しており、今後、アプリケーションを拡大し、最終的にはシェア 1 位を目指している。

※ POR(Process of Record)：顧客の半導体製造プロセスにおける装置採用の認定

Q. 中国市場及びその他の地域への展望について

A. 米中間やそれによる日本の規制、中国国内の国策により、最先端装置は販売できないものの、安全性・環境性能・品質の高さなどへの評価から依然強い引き合いがある。そのため、中国は市場規模の観点からも、引き続き重要な市場と捉えている。加えて、AI サーバー需要の拡大により、先端装置の世界的ニーズも増しており、当社シェアは先端領域の成長に伴って拡大していくと考えている。

一方、他の地域ではインドに大きなポテンシャルを見込んでおり、戦略提携や開発拠点、ソフト人材・大学連携で基盤整備を進めている。

今後も最先端の世界をリードする技術革新力を持ち続け、さまざまなところで当社の装置が採用されるように活動していきたい。

Q. 技術保護と情報開示のバランスを踏まえた特許戦略について

A. 特許が有効で、当社のプレゼンスを主張できる領域においては積極的に出願しており、一方、公開情報により他社へ技術的なヒントを与えてしまう懸念がある領域では出願しないなど、選別しながら両方の観点のバランスを十分に考慮して対応している。

Q. 日本の半導体産業の未来への展望について

A. 当社は、グローバルメーカーとして、お客さまにフェアに対応していく方針を持っている。その上で、日本の半導体産業には成長する余地が大きいと見ている。半導体の重要性が広く認知されており、技術革新と市場拡大が期待できる。サプライチェーンにおいても日本の装置メーカーが大きなシェアを有しているほか、ウェーハやレジストなどの半導体材料でも十分なシェアがあり、これらのサプライチェーンを活用すれば大きな成長が見込めると思っている。加えて、日本政府も半導体産業のみならず、半導体人材の育成に対し積極的であると感じており、日本の半導体産業は今後伸びていくと考えている。